

Abstract

AROMA RESEARCH No.81(Vol.21 No.1)

日本のおい、来し方と行く末

真銅正宏

<要旨>

谷崎潤一郎は、六歳の時に嗅いだ母の乳のおいを覚えていると書く。この記憶力はすさまじい。しかし、あらゆるおいにはリテラシーの差があり、時代の変遷による様々な環境の変化、場所の相違、個人的な体験の有無などから、他人と共有しにくいものも多い。同じ「いちごのおい」「りんごのおい」「水道水のおい」と言っても、品種もカルキの量も異なり、同じものを再現できるどうかは極めてあやしい。季節感自体が失われている今、世の中の無臭化はますます進むであろう。そんな今だからこそ、今あるおいに敏感になることが大切ではないか。そうすれば、現代にも存在するもっと豊かなおいの世界に触れることができるかもしれない。

<キーワード>

プルースト効果、ノスタルジー、文学、谷崎潤一郎、永井荷風